

審査報告書

本多善氏の博士論文『日系マイノリティの歴史からみるアメリカ多文化主義批判—ツールレイク・キャンプのサバルタン史から—』の審査について以下のように報告する。

論文構成

本論文は、ツールレイク・キャンプを経験した日系移民の立場からアメリカ多文化主義言説を批判的に考察することによって、従来の国際文化学において十分に注目されてこなかった批判的なアプローチを展開したものである。そこでは多文化主義言説の元、他者の文化の管理や同化が進められてきたことが、ツールレイク収容所に収容された日系移民に対するインタビューを通して明らかにされる。本論文は序章、本論（第1章-第8章）、結論、参考文献リスト、付録資料から構成されており、総ページ数は199ページである。

以下、各章について説明する。

序章では、アメリカ多文化主義の中に於けるサバルタンとして、日系移民というマイノリティの中のマイノリティに注目することを著者は説明する。これは1943年に行われた「忠誠心調査」と呼ばれるものに対して多くの日系移民が忠誠を誓う中、答えを拒否した者や忠誠しなかった者たち（「不忠誠者」）を指す。こうした人々が集められたのがツールレイク・キャンプであり、そこに収容された人々の語りを丁寧に見ていくことによってアメリカ多文化主義言説に存在する問題点を明らかにする、という問題意識が述べられる。

第1章では国際文化学の概論を説明し、現在までの国際文化学の定義では、よりミクロな視点が不在となっていることを明らかにしている。本章では、従来の歴史において語ることがなかった日系移民への抑圧に注目することで、本稿がどのように国際文化学に貢献できるかが述べられている。

第2章ではヘーゲル、フクヤマ、タカキの代表的著作『歴史哲学講義』『歴史の終わり』『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』を中心に、「ナショナル・ヒストリー」と「多文化主義に登場する日系移民の問題」を扱っている。本章では、ヘーゲルの「理性的人間と歴史」についての記述と、フクヤマの「理性的人間による認知を求めた闘争」との記述を詳細に分析し、彼らが国民的な語りから歴史を構築していったことに言及している。次に、タカキのアメリカ内部のマイノリティに関する語りに注目す

る。著者はタカキの歴史記述が、国民を生産すると同時に、国家の物語を生産してきたことを批判的に検証する。具体的にはタカキによる日系移民についての語り、彼/彼女らがアイデンティティーの葛藤に陥ることなく、「善き移民」として語られていることである。本章では、ヘーゲルとフクヤマの国民的歴史観が、最終的にはタカキの歴史叙述によるマジョリティに貢献するマイノリティの物語として現代に引き継がれていると主張する。

第3章では、善良な「日系アメリカ人」が生産されてきた一方、そうした歴史から排除されている人々に注目するため、日系移民のサバルタンの歴史に注目している。まず日系移民の多様性に注目した二つの小説、オカダの *No-No Boy* とファンケの *The No-No Boys* という二つの文学作品が取り上げられる。オカダの作品は日米でも有名で日系移民の複雑なアイデンティティーの揺れに注目した小説である。一方、ファンケの作品は、本稿の中心的な議論となるツールレイク・キャンプを舞台にした小説であり、小さな出版社から発行されている小説のため、今まで日本でもアメリカでも全く注目されてこなかった。著者は、この二つの小説はナショナル・ヒストリーにおいて語られることがなかった日系移民のアイデンティティーの多様性について描かれていると主張する。

第4章では、歴史的に排除されている日系移民に注目するためにはオーラル・ヒストリーが重要であることが説明される。本章ではオーラル・ヒストリーの目的と方法を明らかにし、トランスクリプションといった質的研究の調査方法について述べられている。

第5章、6章、7章では、ツールレイク収容者の直接的な語りが紹介されている。ここでは、それぞれのインタビューを通して得られたツールレイク収容所に関する歴史がその語りに忠実に再現されている。そこでは3名のツールレイク・キャンプ被収容者の証言が用いられ、ツールレイク・キャンプと忠誠心調査との関係、ツールレイク収容所の実態、ツールレイク収容者のアイデンティティーの問題、ツールレイク収容者が解放された後の排斥と抑圧、言葉の問題についてのナラティブが紹介される。

第8章では、第5章6章7章の証言から多文化主義の問題が直接議論されている。著者は、ここでアメリカの多文化主義言説の問題を明確にし、多文化主義言説に登場しない彼/彼女らの声から、日系移民が戦後、多文化社会の中で国民国家による忠誠/不忠誠としてのレッテルを貼られてきたことを明らかにする。ツールレイクの歴史と彼/彼女らの証言から多文化主義を考察することで、日系移民が多文化主義言説の中で十分に語られなかったことを明らかにし、多文化主義言説において、善良な国民として日系移民が「日系アメリカ人」

として創造されてきたことを明らかにしている。

結論においては、本論文の内容をもう一度簡単にまとめるとともに総括が述べられている。

評価

本論文は上記のように、ツールレイク・キャンプに収容された人々の語りを細かく分析していくことにより、アメリカ多文化主義言説に埋め込まれた問題点を明らかにする。その中で、国際文化学の中においては、多数派／少数派、マジョリティ／マイノリティ、中心／周辺という二項対立の形で捉えられてきた多文化主義の問題を、マイノリティの中のマイノリティの語りに注目することによって明らかにする。その意味で国際文化学の発展に寄与すると考えられる。具体的には以下の通りである。

1. まず学問的意義としては、何よりも日系移民の歴史において語られることがなかったツールレイク強制収容所と、そこでの被収容者のインタビューを分析することで、アメリカ多文化主義の問題点を明確に示した点が挙げられる。このことは、ミクロな視点を記述・分析することで、これまでの国際文化学では軽視されてきた欠落部分を補うことになる。ついで、著者は従来のヘーゲルが打ち出した「ナショナル・ヒストリー」を前提とする歴史構築を批判的に捉え、そうした国民を再生する歴史構築が現在の多文化主義を称えるアメリカの日系移民についての語りにも影響を与えていることを明らかにする。これにより、日系移民が「善き移民」としてアメリカに貢献する物語として語られ、国家に完全に統合されることになったことを批判する。さらに、こうした一方的に語られてきた日系移民を語り直すために、サバルタン論を援用し、ツールレイク強制収容所の歴史をアメリカ政府が日系移民に対して行った忠誠心調査との関係から考察する。これにより国家の枠組みに収まらない人々のミクロな視点を提示したことは本論文が国際文化学に対して大きく貢献できる点である。
2. そうした貢献を、確かなものに行っているのが方法論の妥当性である。著者は、オーラル・ヒストリーの重要性を強調し、元ツールレイク日系移民の語りに注目することで、歴史的に排除されてきた日系移民の存在を見事に再構築している。そうしたところに本論文の独創性と新規性が見て取れる。ただし方法論は妥当であるものの、より正確な記述の必要性があることも委員から指摘されていることを付言しておく。
3. 語り手の語りの中で「アンケートがカテゴリーを構築する」という点が強調されていることも特筆に値する。アンケート調査が「実態」を事後的に構築することはこれまでも調査批判の文脈で批判されてきたが、本論部での収容所のアンケート調査はまさ

に典型的な例と言えるであろう。さらに、そのアンケートの答え方の中にも非常に多様で実践的な生活戦略が見え隠れしている点を明らかにしたことも評価に値する。

4. また本論文は多様な生活の文脈の中で答えられた思想調査が従順な他者と反抗的な他者を類型化していく装置であったことを明示し、同時に調査だけでなく収容所というものの自体も実はモデルマイノリティと反抗的な他者をそのつどカテゴリー化していく巨大な権力装置だったことを明らかにする。このこともまた博士論文として意味がある。

本論文は出版に向けた交渉を始めており、その学術的価値は社会的にも評価されている。本論文の方法論についてはまだ改善の余地はあるものの、博士論文としての十分なクオリティを持っていることは明らかである。

以上の理由から、本論文が博士号授与に十分に値すると本委員会は結論する。